



2010年8月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2010年8月
第 81 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩 (20) (岡田健嗣)	1
一 言 (岡田健嗣)	3
点字から識字までの距離 (77) (山内 薫)	8
漢字と漢点字と (鈴木洋子)	12
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子)	19
東京漢点字学習会報告 (菅野良之)	22
漢文のページ	25
漢点字講習用テキスト(初級編・第20回)	27
ご報告とご案内	30
編集後記 (木下和久)	31

二つの系列の基本文字を構成します。

ウ

(5) 家 カ ケ いえ や

「家」は「家」を表す漢点字符号です。「」は、「ウ冠」として他の漢字を構成します。

例… 寄 宙 容 定

(6) 宿 シュク やど やどる

「宿」は「宿」を表す漢点字符号です。「」は、二つ目の「ウ冠」と「ワ冠」として他の漢点字を構成します。

例… 字 害 寛 冤 冠
軍

(7) 学 ガク まなぶ

「学」は「学」を表す漢点字符号です。「」は、「学」や「愛」や「毎」の冠や「なべぶた」などを表す符号に用いられます。

例… 京 哀 覚 育

エ

(8) 言 ゲン ゴン いう こと

「言」は「言」を表す漢点字符号です。「」は、「第一言偏」として他の文字を構成します。

例… 討 話 訪 議

(9) 語 ゴ かたる

「語」は「語」を表す漢点字符号です。「」は、「第二言偏」として、他の文字を構成します。

例… 詩 請 謗 試

* 言偏を含む文字も沢山あります。そこで漢点字では「」と「」の二つの言偏を用意しました。

オ

(10) 頁 ケツ ページ

「頁」は「頁」を表す漢点字符号です。「頁」は日本語では単独に用いられることはほとんどありません。訓読では「ページ」と読まれますが、「米」を「メートル」、「瓦」を「グラム」と読むのと同様です。「おおい」と呼ばれる部首として他の文字を構成します。そこで漢点字では、「基本文字」に位置づけました。

例… 額 顔 頸 頭

(11) 貝 バイ かい

「貝」は「貝」を表す漢点字符号です。「」や「」の形で、財産や宝を表す文字を構成します。

例… 貨 購 財 資

一言

岡田 健嗣



「読む」と「見ると」

この五月二十七日（木）に、田園調布ボランテイアセンターでお話をさせていただきました。前号のご報告の通りです。このことは私にとって、視覚障害者である私が、どのように読書と向き合ってきたか、あるいは回避してきたかと言うことを、再度考えさせられることにもなりました。その究極に（漢点字）があることをも、再確認させられたのでした。

暫く以前のことですが、文芸誌の評論に「…を読む」というタイトルがよく見られました。「…を」には、書籍のタイトルが入るのが普通で、そうでなければ文筆家の名が入ったり、出来事や事件や状況が入ったりしました。文芸誌でなければもっと広く、政局や市況や国際関係などにもよく用いられました。現在では「空気を読む（読めない）」なども用いられています……。

文芸誌に掲げられる評論のタイトルに「…を読む」とあるのは、ある書物を対象に、そのタイトルの著者の読み方があって、それは他の人々の読み方と少し違

う、あるいは際だって違う、あるいはより深いと言っているか捉えられます。これを敷衍し一般化して見ると、一つの作品、あるいは一人の文筆家の文章への理解も、十人の読者がいれば十通りの読み方があって、しかもそれが通常であること、そして読者それぞれは、その読み方を主張できるということです。

たとえばドストエフスキイの作品の理解を例に挙げれば、戦前から戦後にかけて二人の批評家、思想家の捉え方がわが国の読み方の主流だと言われています。その一人は小林秀雄、もう一人が埴谷雄高です。小林秀雄は、わが国の文芸評論のスタイルを作り上げた批評家です。ドストエフスキイに関しても、大変魅力に富んだ理解を展開しておられます。小林の評論の特徴は、外観的に言えば引用が多い。原文（この場合は訳文）を引用しながら、論を進めまどめるという方法を確立しました。作品を引用しながら、作家の内面に肉迫するという、その後の批評文の原形を為したものです。そのスタイルは、自らが文学に求めるものを、対象とする作家がどのように扱っているか、ドストエフスキイならドストエフスキイが、どのように向き合っているかを論じているものと言えます。

埴谷雄高のドストエフスキイ理解は、思想家としての埴谷自身と思想家としてのドストエフスキイを対峙

させて、作品から作家の思想を抽出しようとするものです。そこで言われるのは、けだし文学者は思想家でなければならぬ、その作品には、一つの世界が現前していなければならないというものでした。埴谷はしばしば『論語』の「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」を引いて、真理は世界より重いと解いて、ドストエフスキイの作品にその真理を見出したのでした。これも読者にとつて、大変魅力的な主張です。

後にロシア文学者の亀山郁夫が、小林と埴谷のドストエフスキイ理解を批判して、二人ともあまりに自らに引き付け過ぎてはいまいか、自らの文学を語り、自らの思想を語る方法に、ドストエフスキイを位置づけているのではないか、と言っています。亀山は、ドストエフスキイを読むには、ロシアの文化・風土、ドストエフスキイの生きた十九世紀後半という時代、そしてそれを読むのは私たち、二十一世紀の現在の日本にいる者である。このような状況を踏まえて読み解かなければならないと言います。

このようにドストエフスキイというテキストを前にしても、日本というエスニックな場で、時代を共にしたり異にしたりするだけでも、その理解は大きな相違を見せます。そして私たちはドストエフスキイのテキストを読むばかりでなく、様々な読解にも触れること

になります。こうして私たちはそれぞれに読書を経験し、それぞれの読み方を獲得します。

しかしここで、もう一つ大きな要素を見逃すことはできません。正に唐突の憾みはありますが、「学校教育」の制度です。実効性があつたかどうかは別として、学校教育の理念は、一国の国民の教育水準を、国家レベルで向上しようというものでした。産業革命以後の資本主義経済の拡張が、国家に対してこのように要請したものでした。

それは書物の読み方にも大きな影を落としています。「読む」という行為にも、普通教育の立場から一つの水準が示されました。それを基準に、個別の作品や作家にたいしても、先のドストエフスキイの例のように、その読み方に一つの水準がもたらされました。小林のように、埴谷のように読まなければならない、そのような水準が提示されて、そのように読むことのできる力を、学校教育から受け取るというものでした。（勿論現行の学校教育の制度が、満遍なくこのような水準を与えているとは思われませんが、制度の理念はこのようなものだと言えます。）

残念ながら私は、現在の初等・中等・高等教育の課程で、国語の教育がどのようになされているか詳らかにしません。そこで学校教育については、私の思い出

に残っている盲学校での国語の授業から、想像力を働かせることにします。

国語教育はどうやら二つの柱に従って遂行されているようです。その一つは、言うまでもなく文字の習得です。

わが国で用いられている文字、教育の場で取り立てて力を込めて教えられている文字と言えば、「漢字」に他なりません。「漢字」は言うまでもなく日本語の文章、漢字仮名交じり文の根と幹をなす文字で、「漢字」なくしては、日本語の表記は成り立ちません。従って「漢字」の習得こそが国語教育の指標となることを、誰も疑っていません。そこで小学校の一年生から、せつせと書き取りの宿題をこなすことになりま

す。二つ目は、読む力・書く力、文章力を養うことです。文字（漢字）を覚えても、どう使われるかを知らなければなりません。これには書かれたものを読んだり、自ら文章を書いたりという体験が求められます。そこで国語の教科書には、読むべき文章が載っていて、授業ではそれを声に出して読み上げるといことが行われます。さらに副読本があったり、読むべき書物が指定されたりします。

文章を書く力をつけるには、作文が最も有効と考え

られています。行事やイベントや、あるいは授業に関連したテーマなど、機会を捉えては作文の宿題が出されます。その他にも詩や短歌や俳句を作るなど、文字を文章に定着する術を習得するよう要請されます。遙か遠く、私の盲学校での学習を思い起こすことに

します。盲学校でも普通校と同様に国語教育はなされます。違うのは漢字教育が行われないことです。従って書き取りの宿題は出されませんが、作文や短歌や俳句を作ったりはしました。小・中・高の課程で、このように授業は進められました。これは私の出身校である横浜市立盲学校ばかりでなく、東京の教育大附属盲学校を含めた全国の盲学校でそのように授業が行われていたはずです。

何年かに一度、中学部や高等部に、新任の国語の先生が赴任されました。そのような先生はいつもひどく戸惑っておられました。前もってレクチャーはあったにしても、漢字を全く学んで来なかった生徒に国語教育を施すなど、ほとんど想定外だったのでしよう。そんなことを授業中に口にされた先生もおられました。とは言っても一年間の授業は計画通り進められなければなりません。二年・三年経つうちに、そのような先生も要領をマスターして行かれました。

私には残念ながら私を最良して下さる先生はおられ

ませんでした。しかしお一人だけ打てば響くように応えて下さる先生がおられました。その先生が授業中に、「学校の科目など国語と数学だけで十分なんだ。」とおっしゃったのです。私は驚いて、「歴史や倫理は要らないのですか？」とお尋ねしたところ即座に、「歴史や哲学は、大学では文学部なんだよ」とおっしゃいました。どうりで私は、日本史が苦手な訳だったのです。

そのようにして盲学校を卒業して、社会へ出ることになりました。ところがそこは、想像を超えた言葉の世界だったのでした。

その後十年近く経って漢点字に巡り会うことができただけでしたが、漢点字を勉強してみても、なるほど、漢字を身につけなければ日本語は使えないということ、身にしみて知ったのでした。

視覚障害者自身、あるいは視覚障害者の周辺におられる健常者の中には、視覚障害者は漢字自体は知らないかもしれないが、その音読と訓読はよく知っている、と言われる人がおられます。一九八〇年代にはよく聞かれたものでした。しかし私自身振り返って見ても、どうもそんな気がしません。

また漢字を知らないと同音異義語が理解できないということもよく聞かれます。これも私自身振り返って見て、確かにその通りだとは思いますが。しかしそれは

半分しか言えていないという感を抱いたものでした。漢点字を勉強してみると、後の半分が何なのか徐々に分かって来たのでした。

漢字の勉強は、先ず文字の形、次いで音読と訓読、そして文字の意味と使い方の順に進められます。漢点字でも同様に、先ず漢点字の形、音読と訓読、そして文字の意味と使い方を学びます。漢点字の形は漢字の形に従っています。音読と訓読も漢字に従います。意味や使い方も同様に漢字に従います。

文字の使い方についてはかなり後にならなければ会得できなかったように覚えていますが、先ず驚いたのが、私は訓読は取り立てて勉強しなくても分かっているから難しくはないだろう、と勝手に思い込んでいたのが、決してそうではなく、訓読の習得こそが日本語の語彙の習得の第一歩だということを知ったことでした。

例を挙げれば、「可」という文字の音読は「カ」、訓読は「よい、べし」です。その後の意味や使い方を勉強するのですが、その前に私は「べし」などという訓読のあるのに驚かされます。このような驚きは無数にあって、「肯」の訓読は「うべなう、がえんずる」、「購」の訓読は「あがなう」、「賜」の訓読は「たまもの、たまわる」……と言った具合です。

私は訓読というのは日本語の読みだから話し言葉だ

ろう、と考えていました。ところがこのように、普段の話し言葉では使われない、書き言葉でも現代文ではほとんど使われない言葉が無数に出て来ました。さらに「慮」は「おもんばかる」、「省」は「かえりみる」、「承」は「うけたまわる」のように、「おう」と「はかる」、「かえる」と「みる」、「うける」と「たまわる」とのように、和語の複合語まで訓読として採用されていることに、少なからず驚かされたのでした。

そしてさらに、「贖」は「購」と同様に「あがなう」、「諾」は「肯」と同様に「うべなう」、「顧」は「省」と同様に「かえりみる」と訓読されます。これらそれぞれ対になった文字は使われ方が異なっていて、意味の離れた文字に見えますが、詳しく見ればこの訓読が二つの文字が密接に関係づけられていることを示しています。私たちが使っているこの日本語の豊かさは、漢字の媒介なしにはあり得なかったことをも示しています。

明治以降、漢字を排斥したり制限したりする論調が聞かれます。確かに未整理の文字は混乱のもです。しかし漢字は要らないと主張される方々も、漢字仮名交じり文で論を展開されています。そういう方々は、漢字の知識を持たない人々ではありません。むしろ私たちより遥かに豊富にお持ちの方々です。

それに引き替え幼少時よりの視覚障害者は、漢字の習得そのものから阻害されています。わが国における視覚障害とはその意味で、言語障害の一つの型と言ってもよいのではないかと私は考えています。私自身の過去を思えば、社会に出ての苦しみの多くが、語彙の貧困によるものでした。遅まきながらそれを獲得するに従って、自由度が増して来ました。

読者諸兄姉へのお願いです。

今後視覚障害者とお話する機会をお持ちの際は、その言葉遣いにご注目下さい。中途失明の方は比較的少ないのですが、私のように幼少時からの視覚障害者は、その言葉遣いに特徴があります。幼児性が感じられると言っては言い過ぎでしょうか？漢字の知識がなく、書き言葉との接触が乏しいために、耳から入る音声言語を頼りに話をしなければなりません。そのために本来書き言葉と音声言語とのフィードバックによる言語の発達が、幼児期の辺りで止まってしまふ、そんな状態と私は捉えています。私もその癖を十分払拭できているとは言えませんが、皆様の暖かく厳しい目が、視覚障害者の言語と文化の将来に必要とされています。皆様の厳しさとゆとりのある優しい視線が、視覚障害者の言語を養います。酷い厳しさをなく、優しい厳しさを賜れば、まだまだ捨てたものではないと感ぜられるに違いありません。

点字から識字までの距離（七七）

盲学校・ろう学校生のインターンシップ（一）

山内薫（墨田区立あずま図書館）

七月から八月にかけて毎年、中学生や高校生のインターンシップ（職場体験）が何組も図書館を訪れる。ほとんどが二〜三人で二日間、図書館の様々な仕事を体験することになる。窓口や資料の装備などが主な業務になるが、カリキュラムのなかに必ず点字体験を一时间組み込み、簡単な点字の知識や概要を説明した後、仕上げに自分の名前をタックペーパーに点字で打ってもらい好きな場所に貼れるようシールを作成する。

三年前、文京盲学校のN先生から、盲学校の生徒の職場体験実習を受け入れてくれないか、という依頼があった。N先生とは一時日本図書館協会の障害者サービス委員会でご一緒したことがあり、その関係での依頼だった。今まで、区内の中学校の障害児学級に在籍する生徒の実習を受け入れたことはあるが、盲学校からの依頼は初めてだった。しかし全国に三〇人以上も視覚障害の図書館員が働いているので、視覚障害学生

の職場体験の場として当然図書館も有力な実習の場にならなければと、快くお引き受けすることにした。

件の生徒は高校二年に在籍するKさんで、八月一日から三日の三日間、あずま図書館で職場体験実習を行うことになった。Kさんは身体障害者手帳1種1級、未熟児網膜症で右眼が光覚弁、左目が手動弁で点字使用。大学進学を希望し、将来は英語の教師を目指している。丁度八月一日から二週間、立教大学の司書課程で学んでいる四年生のSさんが図書館学の単位取得のために実習に来館するので、初めの三日間は一緒にカリキュラムで実習してもらうことにした。図書館学の実習は通常二週間から三週間なので、その都度期間内でできる課題を与えることとしていたが、今回はまずKさんがSさんに点字を教え、ふたりに協力してあずま図書館の閉架書庫にある点字図書の本目録



Sさんに点字を教えるKさん

を作成することを課題に選んだ。またKさんはパソコン操作に慣れていること、音楽が趣味で簡単な曲ならキーボードを弾けることもわかったので、二日目には緑図書館の小さい子どものためのおはなし会とその後の清風園でキーボードやピアノを弾いていただくことにした。

Kさんの住所は川崎市多摩区にあり、初めての場所に遠方から通勤時間帯に一人で来るのは難しいので、朝と夕方には保護者の方が送迎して下さることになった。

八月一日、第一日目は午後には寺島図書館で音訳者の集まりがあるので、一緒に行ってもらうことを中心に以下のような予定表を作成した。

八時半 あずま図書館に出勤

立教大学の実習生Sさんに紹介



寺島図書館で

九時半 全体の話し合いであずま図書館職員に紹介
九時四五分 館内の案内

一〇時～一一時 カウンター業務

一一時～一二時 Sさんへの点字指導

一二時～一三時 昼休み

一三時～一三時半 寺島図書館への移動(歩き)

一三時半～一四時 寺島図書館見学

一四時～一六時半 音訳勉強会

(墨田区の音訳者二〇名ほどが四つの課題をテープに録音してきますので、それを聴いてコメントしてもらいます。)

一六時半 寺島図書館にて解散

まず、立教大学のSさんとお互いに自己紹介した後、今回の三日間の実習のおおよその予定と課題として点字図書の日録をとってもらうことを伝えたが、A四版一枚で作成した実習予定表はもちろん点字版も作成しKさんに渡した。

あずま図書館では毎朝九時半から話し合いがあるので、そこで全職員に紹介、その後図書館の中を案内して歩いたが、ブックデイトekション(盗難防止用のゲート)に興味を持った様子だった。

一通り館内や閉架書庫を案内した後、窓口業務(返



却と貸出)についてももらった。ほとんど見えない視覚障害の人が本の返却や貸出ができるかどうかこちらも不安だったが、図書館の本に貼られている読み取り用のバーコードは基本的に貼る位置が定められており、貼ってある場所は保護用の塩ビシートが貼ってあって多少盛り上がりしているので指で確認できる。その位置は本の背を左にして左下の部分ということになっているので、表表紙か裏表紙かを確認する必要があるにしても二回の確認で場所を特定できる。そして、そこにバーコードリーダーを当てて読み取りが行われればコンピュータの端末がピツという音を発し返却作業が完了する。と口で言っ

てしまえば簡単なようだが、実際にコンピュータの画面の見えるい彼女の場合、図書館の本のバーコードを読み取ったのか、他のバーコードを読み取ったのかを画面で確認することができない。最近の



初日、障害者サービス室でのKさんSさん

本や雑誌は、裏表紙のあちこちにバーコードが印刷されており、それらのバーコードを図書館のバーコードよにも先に認識して読んでしまうこともあり、その場合には画面上に「IDが正しくありません」というメッセージが出るのだが、パソコンが発する音は正しく読んだときと同じ音なので、画面を見なければわからない。ただし、その後正しいバーコード番号を読めば、その本の返却処理は完了するようにはなっているが、返却したつもりの本が実は返却されていないということが起こってしまうので、やはり補助的に画面を確認する人の目が必要になってしまうのだ。今回は私もそばについている

ので問題ないが、彼女が全く一人で貸出返却業務を行うことは困難ということになってしまう。(ただし返却に関しては、一度窓口で返却した本を書架に出す前にもう一度まとめて返却処理すること



窓口に来るKさん

になっているので、未返却のままになってしまふことはほとんどあり得ない。午前中の一時間にはそれほど利用者もなく、無事に済み、一時からの一時間はSさんへの点字指導をお願いした。

昼食の後、午後は音訳勉強会が行われる寺島図書館に歩いて向かった。KさんのガイドをSさんをお願いしたが、初めてとは思えないほどしつかり手引をしており、何より感心したのは一緒に歩きながらどんなお店があるか、今どんなお店の前を歩いているかなど初めての道を歩くKさんの目の替わりをしつかりと果たしていたことだ。

さて音訳勉強会というのは月に一回、日頃活動して下さっている音訳者の方たちに集まっていただき、情報交換をしたり、三分程度で読める課題を皆さんにテープに録音してきていただき、それを全員で聴き合うという会で、十年以上続いている会である。音訳の講習会は毎年初級を開催して新しい音訳者の養成を行っているが、受講してすぐに本の音訳に取りかかれる人はほとんどなく、初級修了者及びその他の音訳者のフォローアップと勉強のために毎月開催している。初級修了者は、まず経済関係の雑誌の目次を読む課題に挑戦していただき、この人なら記事も依頼できると判断

すれば、その後、雑誌記事を九十分テープ一本分依頼し、尚この人なら本を頼んで大丈夫と判断すれば本を依頼するという事になる。要するにこの音訳勉強会は音訳者の勉強の場であると同時に図書館側が音訳者のレベルを判断する場なのである。

この日も四分ほどで読める課題を四種類用意して、それぞれの音訳者に録音してきていただいた。普段は私達が聴いて読み方などについて意見を言うのだが今回は視覚障害利用者が実際に聴いて意見を述べてもらえる良い機会になった。二時間近く音訳者の録音した課題を聴いて感想を述べるのはさぞ疲れたことだろうと思う。同席したSさんは次のような感想を述べてくれた。

「皆さんの音訳は安定したテンポですごく聞きやすくて本当に上手だと感じた。でも早さ・注・読み方・記号に関しての決まりがきちつとあるわけではなく、その音訳者に委ねられている部分があると知ると、知識も経験も重要なんだと気付いた。視覚にハンディを持つ人は漢字がわからない人もいるので、文字から意味を理解できないので、同音異義語の注に皆さん困っていたようです。文章を見ず、耳で聞くだけで文章を理解することは難しく、それだけに音訳者の腕にかかっ

ていると感じた。」

音訳者からはKさんに対して「普段知らない単語にどう対応するのか？注釈は入れた方がよいのか？」などの質問が出された。

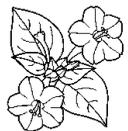
Kさんの日誌には次のような感想が述べられている。

「今日は何もかも慣れるので精一杯でした。最初図書館へ行くとき、今日1日無事に終わるのか心配になり自信もなく、不安と緊張でどうなるかと思いました。カウンター業務では慣れてくるととても楽しく感じました。Sさんへの点字指導では、教えながら、点字の特徴について改めて気づいたこともあり、勉強になりました。そして、全くかけ離れていることかもしれないですが、指導したことで、教えるということがどういうことか、経験でき、将来先生になろうと思つているので、それに生かせたらいいなと思つています。

音訳勉強会では、2時間ずっと音訳された方々のを聴いて、コメントするというのがを繰り返し行いました。でも、コメントするとき、頭の中でまとまっていなまま発言してしまったことがあったので、目標が生かされていないと思ひ、引き続き目標にしたいと思ひます。」

漢字と漢点字と

鈴木 洋子



「堊(ぬた)」という字は、わが国で作られた漢字である。ということがわかったのは、漢和辞典にこの字が載っていないからです。

三月二十七日読書会のメンバーと、俳人、飯田龍太郎の「山廬」を見学したあと、藤堊の滝へまわりました。滝と聞いて思い描いていたイメージとはだいぶ違っていました。一日ドライブをした境川周辺の風景に私は魅了されました。御坂山地へとだんだんせり上がっていく地形は結構きつい坂ですが、陽当たりもよく、全体が明るく開けているという印象なのです。里山というのはこんな場所をいうのでしょうか。そういう所を走って、夕方近く、藤堊の滝のある大窪いやしの杜公園へ着きました。大窪というから大きく窪んでいる。その中に滝が設えてあるのです。半分にした丸太の中を割りぬいて、坂になっているところへ横たえ、片側に八本の管を突き通す。そこへ沢から落ちる水を流す。管から八本の弧を描いて水が落ちてくる。ちよつと、これを滝というの、という思いでしたが、湿地にたくさん植えられている水芭蕉は、ちらほらと白い花を咲かせ始めていました。

で、帰宅して、一首なり一句なり出来ないものかと考えていて、「垚」が漢和辞典に無いということを見つけたのです。ワープロ漢字事典に出っていました。国字、湿地帯とあります。山影の湿地帯というのはどこにでもある地形だと思うのですが、中国から伝えられた漢字の中にはそれに相当するような字が無かったのでしょうか。ともかく日本人は「垚」という漢字を作ってしまった。佛、凧、雫、嵐、峠、辻、榊、畑、畠、鯛、鱈、鯨、…百科事典の「国字」の項にはその他いっぱい列挙されています。一つひとつの字を見てゆくと、なかなか面白い作り方がしてあります。

私はボランティア活動として、「横浜漢点字羽化の会」に参加しています。このグループは、漢点字で表わされた点字の資料を制作することと、漢点字の普及に努めることを目的としています。一般的に点字という言葉は、見聞きすることはあっても、漢点字という言葉が薄いのではないかと思います。ここで、点字とそして、漢点字について簡単に説明してみましよう。

世界で初めて点字を創案したのは、ルイ・ブライユというフランス人です。馬具製造職人の子として生れ、幼少のころ父親の仕事場で遊んでいて怪我をし、それがもとで失明したという。入学した盲学校では、文字の勉強としては、浮き出し文字といって、板の表面を彫って、文字の形を浮き出させたものを使ってい

ました。その板に触って字の形を読み取る（触読）のですが、これは非常に難しいことです。たとえ、一つの文字が読めたとしても、文章として読むことは、なかなか出来ることではありません。日本でも江戸時代の末に、浮き出し文字が考えられたことがあったのですが、事情は同じだったでしょう。それに、書くということは、始めから考えられていませんでした。ブライユが盲学校中等部の時、陸軍に夜間連絡用の、触って読む暗号、というものがあるということを知りました。ブライユはそれにヒントを得て、浮き出し文字ではない、まったく別の文字を考え出しました。それが現在使われている、点を組み合わせて文字としている「点字」です。視覚障害者のブライユが非常な苦勞をして点字を創案したのも、「字を知りたい」という切望があつたればこそです。この点字を覚えれば、読むことも、書く（点を打つ）ことも、そして記録（保存）することも「独力」で出来るのです。ブライユの同僚たちは驚喜しました。視覚障害者の曙です。一八二五年のことでした。しかしブライユの生前（四三歳で肺結核で死亡）には点字は普及しなかった。晴眼の教師達が、点字を文字として認めなかったからです。それでも、点字使用者はだんだんに増えていき、一八五十年代の末には、欧州各国で公認されるようになりました。

日本の場合はどうだったか。「日本語点字」が政府から認知されたのは、一八九〇（明治二三）年です。維新後、日本は西欧をお手本にあらゆることを急改革しました。教育分野も勿論で、初等教育の義務化が行われ、盲学校も創設されました。そしてこの学校の石川倉次教師が、日本語点字を翻案しました。これが今使われているわが国の仮名点字です。

私は、十年ほど前に新宿の朝日カルチャーセンターで点字教室の受講生になりました。点字が身の周りにあったというわけではありません。息の長いボランティア活動が出来るかも知れないという漠然としたイメージで入ったのですが、初めて見る点字本には吃驚しました。表にも裏にもぎっしり並んだ小さな粒粒。これを指先で読み取れるのか、と感動ともいえる気持ちを抱いたことを、今でも覚えております。仮名点字がタイプライターで打てるようになった頃、教室のメンバーと食事をしていて、「仮名点字とは違う、漢点字というものが存在する」ということを聞きました。木が二つで林、三つで森。これを点字で表わすのだという。仮名点字では漢字を度外視している、ということの重大性をその時でも、正確には認識できてはいなかったのですが、妙に心に残るものがありました。事情があつて点字は一年程中断したのですが、その後、背中を押してくれる人がいて、その漢点字のほうのグル

ープ「横浜漢点字羽化の会」に入れて頂きました。そして、ここでいろいろなことを考えさせられることになったのです。

点字は縦三個、横二列の六点を一マスとしています。そしてこの六点のどこが突起しているかを読みとるのです。例えば、左一番上ひとつだけが突起していれば「あ」です。その下と続いて二つ突起していれば「い」。左一番上と二列目の一番上（横に二つ）突起していれば「う」。六個全部突起していれば「め」。一マス六個をこのように組み合わせると六十三通りできます。アルファベットも日本語五十音もこれで十分表わせます。因みにアルファベットの「a、b、c」、数字の「1、2、3」、日本語の「あ、い、う」は、それぞれ同じです。ではどこで区別するかというと、前のマスへ「次はアルファベットだよ」、 「数字だよ」、と示す符号を前置するのです。仮名点字を受講していた時、視覚障害者の方が、実際に点字本を読んで見せてくれたのですが、その速さに驚きました。両指使いなのです。先ず、左指をすべらせて行の半分まで読みます。その時、右指は行の後半でスタンバイ、右指にバトンタッチした左指は次の行の始めへ移動してスタンバイ。途切れるなどということはありません。パソコンのキーボード上を両手が滑らかに動くのと同じです。

仮名点字と書いてきましたが、これは漢点字が出来るからの呼称です。石川倉次氏が点字を作った時、漢字のことは頭になかった。仮名だけであつてもそれまで読み、書きの手段を持てなかつたことを考えれば、仮名点字の完成は画期的なことだつたでしょう。しかし、日本語は漢字と仮名が交じつて成り立っているものです。石川氏に、「漢字のない点字では、不完全」という思いがあつたら、日本語点字は違つた発展の仕方をしたはずです。ところが、石川氏は、点字に漢字は不用と考えたばかりでなく、日本語自体、ローマ字表記すべし、という考えの持ち主でした。漢字などという面倒なものを使っているから、日本文化は西欧に遅れてしまつていゝのだ、とそういう運動を熱心に行つた人だつたのです。

それでは、漢字交じりの「漢点字」は、いつできたのか。漢点字の全体系が発表されたのは、一九六九（昭和四四）年七月十七日です。創案者は川上泰一氏。川上氏は戦時中、軍の飛行機のエンジニアでした。戦後、職を探して、「農学校を紹介された」と思つて行つてみると、盲学校だつた、というのは伝説的なエピソードです。伝説的とは、求めて入つたわけではないのに、成し遂げた業績の大きかつたことを指しています。川上氏が大阪府立盲学校で見たもの

は、漢字のない（ひらがなとカタカナの区別もないのです）点字でした。

ㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩㄩ

鍼灸で使う治療点（つぼ）を、「経穴」という。その経穴には一つ一つ名前が付いている。勿論その名前も全て（漢字）で表わされる。その読みも全て音読みである。「中府、雲門、天府、侠白、尺沢、孔最、列欠、経渠、太淵、魚際、少商」（手の太陰肺経）からはじまり、三六〇個を超える数を覚えなければならぬ。こうやって本来の漢字で書いてみると、こんな勉強も案外面白いかも思ふのだ、これを力ナだけで読まされたらどうか？そんな風に勉強していたのである。

あるときある点字図書館で、親しくなつた職員から、「漢字の本ができてきたんですよ。ラベルを貼りたいのですが、ケイケツのケイは経でしょうが、ケツという字はどんな字か見当が付かないのです。」と言われた。私は「穴」と答えられなかつた。このような会話が、何時でも何処でも繰り返されていゝのである。

このようにして「漢字」を知っているか知らないでいるかが、人（健常者）と人（視覚障害者）との間の隙間を広げているのである。私のばあいはそうであつ

た。

ロロロロロロロロロロロロロロロロ

これは、「横浜漢点字羽化の会」代表の、岡田健嗣さんがグループの機関誌に発表した文章の一部です。

幼い時失明した岡田さんも、漢字とは無縁の所で教育を受けたひとりでした。川上泰一氏は、盲学校生が漢字を学ぶ機会がないという事実に衝撃を受けました。

そして、なんとかして漢字を教えたい、点字で漢字を表わすことはできないだろうか、と深く考え、漢点字を創り出したのです。二十十年の歳月が費やされました。「川上漢点字」の特色は、漢字の成り立ちから研究し、点字化していることです。漢字は（へん）や（かんむり）、（つくり）や（あし）など、部首を組み合わせて作った、組み立て文字です。この部首を記号として見れば、点字も記号ですから、点字の漢字（漢点字）が作れるのです。そして、「木」の音読みは「ぼく・もく」、訓読みは「き・こ」であるし、また「木へん」でもあると学べるのも、漢字というものに触れることができて、始めて可能になるのです。私の名前「ようこ」は「太平洋」の「洋」ですが「太陽の陽」もあるし、「葉っぱの葉」もあるし、「遙子」もある、ということも、漢字に一度も触れていなければ、ぴんとこないことだと思います。川上漢点字を学

んだ人たちの手記を読むと、漢字を知らなかった時の戸惑いと疎外感、漢字を手にした時の喜び、その一つひとつに胸を打たれます。漢点字使用者のKさんは、「先ず、自分の名前を漢点字で書いて（打って）みたらいいのよ」と言っています。自分の名前の漢字に託された、名づけ親の思いを正確に受け取ることができずからです。「羽化の会」の岡田代表は二十九歳で漢点字を手に入れました。漢字を知らなかった時、どう考えていたのか思い出せない、もう漢字のある世界にどっぷり浸かって、そこで思考しているから、と言っています。漢字のない世界が別世界になっているのです。漢字を知ること、で、「人生を救われた」、とも述べ懐いています。そして、自身の体験を踏まえて、視覚障害者の一人でも多くを、漢字のある世界へ連れてきたいと、普及活動に情熱を注いでいるのです。

漢点字が発表されて四十年、視覚障害者の中で、今、漢点字はどうなっているのでしょうか。発表当初は熱い期待をもって受け入れられました。七千人位は漢点字取得に挑戦したといわれています。通信制で普及に努めた川上氏には寝る暇もなかったでしょう。氏は一九九四（平成六）年に亡くなるのですが、川上漢点字はその後、巾の広い広がりを持つことは出来ないでいます。漢字の重要性を考えると、信じられないこと

なのですが、理由として考えられることは、視覚障害者自身に、点字離れが進んでいることがあります。視覚障害者の読書とは、点訳された本を触読するか、音訳されたテープを聞くかするわけで、点訳も音訳もボランティアが担っています。何か読みたいと思っても、その本が書店に売られているというわけではありません。録音操作が簡単になったことと、機器の低価格化で、音訳テープが手に入り易くなりました。また、触読よりテープを聞くほうが楽です。パソコンの進歩ということも大きな理由として考えられるでしょう。視覚障害者でパソコンを伝達手段として使いこなしている人は少なくありません。キーボードを叩くと、音声案内があつて、漢字変換もできるのです。パソコンの普及で、墨字（点字に対して、我々が使っている文字を言う）使用者と直接やりとりが出来るようになりました。今までは、墨字を点字に、点字を墨字にしなないと、意志の疎通が図れなかった。これはこれで、画期的なことだと思えます。しかし、学校で、漢字というものを、一度も教わったことがない人が、パソコンの音声案内で、いきなり、漢字変換に直面するということは、どうなのでしょう。さぞかし、笑えない笑えばなしも続出しているのではないのでしょうか。テレビの人気番組、「笑点」と「商店」の変換間違い

があつて、笑われたとしたら。

今、視覚障害者は三十万人位、その中で点字を日常使いこなしているのは二、三万人、漢点字に絞れば千人にも満たないだろうといわれています。点字常用者の中に漢点字が普及しなかったもう一つの大きな理由は、公教育で漢点字を、カリキュラムに組み入れて、教えていないからです。健常者が当然のこととして、小学校一年生から少しずつ漢字を習ったようには、盲学校の生徒は、漢字を教えられていないのです。漢点字取得の喜びの手記を書いた人の中には、盲学校の先生たちもいるのですが、それは点にしか成り得なかったのでしょうか。川上漢点字が、熱狂的に受け入れられた勢いのあつた時、教育現場に確固とした根を張ればよかつたのですが、それはできなかつた。生徒に教えるということは、先ず、自身が、「漢字が必要である」という強い、考えを持たなければできない。しかし、盲学校という閉ざされた世界で生活できていれば、漢字がなくても然程の疎外感を感じないで居られるのかも知れません。努力して漢点字を勉強し、生徒に教えようという情熱は持てないのでしよう。羽化の会では文部科学省等へも働きかけているのですが、役人の重い腰も上がる気配はないようです。今まで仮名点字でやってきたのだからとか、漢点字を

勉強する意欲のある者は、自分で勉強すればよいというのは、教育者として怠慢ではないでしょうか。視覚障害者に漢字まで強いるのは、負担が重すぎるという考えも、漢点字を使いこなしている人たちを見てみると、納得できません。漢字を知った人たちの喜びの声を、謙虚に聞くべきだし、視覚障害者をも、責務として、漢字のある世界へ誘ってあげるべきなのです。視覚障害者もパソコンの力を利用して、漢字交じりの墨字（普通の字）を印字出来るようになった今こそ、なおさらに、漢字を身に点けられるよう、図られるべきだと思います。受け取った文章が、ひらがなばかりだったり、頓珍漢な漢字が使われていたりしたら、我々は、一呼吸おいてからでないかと、その文章を読めないと思います。以下は、岡田さんが、漢点字公認を求めて、陳情する際に製作された、『漢字をこの手に』に収録された文章の一部です。二十九歳になって、初めて漢点字を手にした頃のことを語っています。

ロロロロロロロロロロロロロロロロロロ

そうしながら（注、漢点字を学びながら）、周囲の晴眼者にその時取り組んでいる字について疑問をぶついたりもしました。そのようにしている内に、私の心の中で言葉にかかっていた雲が徐々に晴れて、モノクロームの写真がカラーになったような、あるいはかか

っていたモザイクがすこしづつ融けて、その奥の輪郭がくつきりして来るような、大変具体的な感触を味わえるようになってきました。それまでにはなかった、物事に直接触れる感覚に浸ることができたのでした。それに従って、何か力のような、自信のような、自分の力で物事を追求し、理解できるという手応えが掴めたという実感が湧いて来たのでした。

ロロロロロロロロロロロロロロロロロロ

十三年前、「羽化の会」では、漢点字版の『漢字源』を作って、横浜中央図書館に納めました。発端は、横浜国立大学教育学部へ、全盲の学生が入学したことでした。学生は、漢点字の素養を持っていて、第二外国語に中国語を選択し、漢字文化を勉強したいと希望したのでした。担当教授の働きかけで、出版社や、ボランティアの力が結集しての成就でした。

「扉を開いてあげる」、というのが教育の大切なところだと思うのです。自分の使っている母語が、完全なものではない、という不安は、異国で、その国の人たちの言葉が判らないということよりも、深い戸惑いかも知れません。今も、扉の前で、故知れぬ疎外感に打ちのめされている、かつての岡田青年がいると思うと、胸が痛むのです。

「東京漢点字羽化の会」例会報告と

わたくしごと



木村 多恵子

第55回例会 2010年6月9日(水) 13:30

15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

5月27日の田園調布カトリック教会内にあるボランティアセンターでの岡田さんのお話について、わたしは前回の報告に書いてしまった。漢点字の話を機会あるごとに伝えて広めてゆくことは、とても大事である。「漢点字」という言葉が即視覚障害者にとって読みに最適な、そして漢字の持つ本来の意味が充分備えられていることを知っていたきたいし、視覚障害者自身が目覚めて、本格的に勉強していただきたい。そのために小さなチャンスも逃さないようにしたいと思う。その点で今回の岡田さんのお話はとてもよかったと思う。ただ、新たな視覚障害者が聴衆の中にいらしたわけではないが、いわゆる晴眼者といわれる方々に「漢点字」という言葉を浸透させるのも、漢点字を広める微かな力になりはしないかと思う。

「啄木歌集」は引き続き、入力、校正と作業は行われている。

第56回例会 2010年7月7日(水) 13:30

15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

東京の第二次「パソコンによる漢点字入力ボランティア講習会」は、11月10、17、24日の三回に渡って、ヒューマンプラザ7階の、竹芝小ホール、何れも水曜日の午後、13:30～15:30と決まった。

岡田さんが毎日新聞と読売新聞、朝日新聞に、募集要項を掲載していただけるよう、横浜の講習会のことと一緒に交渉して下さっている。毎日新聞は掲載してくださることが確実になった。

各新聞社の掲載は、9月中頃に依頼し、受講希望者は、10月10日必着で、菅野さん宅へ往復葉書で申し込んでいただき、菅野さんに纏めていただくことになった。

問い合わせ先は岡田さんに御願した。

なお、横浜羽化主催の講習会は、9月29日、10月6日、10月20日、何れも水曜の午後である。

岡田さんの、介護福祉講習会用テキストは急いで手分けして入力していただけた。皆様ありがとうございます。

朝日新聞の毎週土曜日掲載の、「花と柳」(詩人・高橋睦郎)を入力し、漢点字印刷をして、全国の漢点字読者に送って、漢点字を広めることにしたい、と話

し合った。

印刷は横浜のプリンターを使わせていただきたいので、これは岡田さんから横浜羽化のみなさんに話していただき、最初は横浜の皆様にご教えていただき、新しく加わってくださるボランティアの方々の方々の大きなお仕事にさせていただくことにする。

そのために、現在の会員の皆様に、前準備をしていただくこともお願いした。

* 予告

8月の例会（第57回）、2010年8月11日（水）、13…30…15…30、ヒューマンプラザ7階第1会議室

8月の学習会は休会

9月の例会（第58回）、2010年9月8日（水）、13…30…15…30、ヒューマンプラザ7階第1会議室

第41回学習会、2010年9月18日（第3土曜）、

18…30…20…30、ヒューマンプラザ7階第1会議室

10月の例会（第59回）、2010年10月13日（水）、

13…30…15…30、ヒューマンプラザ7階第1会議室

第42回学習会、2010年10月23日（第3土曜）、

18…30…20…30、ヒューマンプラザ7階第1会議室

11月の例会（第60回、第2次「パソコンによる漢字入力ボランティア講習会」、三日間開催の第一日目に代える）、2010年11月10日（水）、13…30…15

…30、ヒューマンプラザ7階、竹芝小ホール

講習会二日目、2010年11月17日（水）、13…30

…15…30、ヒューマンプラザ7階、竹芝小ホール

講習会三日目、2010年11月24日（水）、13…30

…15…30、ヒューマンプラザ7階、竹芝小ホール

第43回学習会、2010年11月20日（第3土曜）、18…30…20…30、ヒューマンプラザ7階第1会議室

わたくしごと

言葉とはおもしろいもので、たった一つの単語が、どんな言葉と結びつくかによって、当然ながらその語のもつ意味合いが多様に変化する。

たとえば「好」というプラス思考の単語でも、繋がる言葉によつてはマイナスの意味にもなってしまう。

「好」という単語に関わる言葉を、「故事ことわざ辞典」（創拓社、鈴木棠三（とうぞう）、1992年版）で見ると、

「好かば心得よ」

「好きな道なら学べ」

この警句には、そうだそうだ、と大いに発奮させられる。

次に、「好き添いは離れやすい」、「好き連れは泣き連れ」というのがあった。え？と驚いて説明を見ると、「恋愛結婚の場合、好いた者同士、添い遂げたものは少ない」とある。

わたしにはこの意味がよく分からない。本当だろうか？と疑っている。けれども先人の経験の積み重ねから作られた言葉なのだから、それなりの根拠はあるのだろう。誰でも異性を好きになり、結婚しようと思うとき、相手をまるごとぜんぶ好いているのではなく、先ず、相手の美点に惹かれ、やがて弱点も見つけ、自分の欠点を顧みつつ相手の弱さを冷静に判断し、受け入れられる程度か考え、折り合いをつけながら愛が優先すれば、結婚を決めるのだと思う。相手の欠点を見ずに、ただ好きだというだけで結婚すれば、いろいろな場面で少しずつ「あれ？こんなことが違う。こんな考えかたをするのか」などと、自分と相手との相違に気づくことであろう。この「相手との相違」を感じるのには、一方的ではなく、お互いに感じ合うのであるから、ずれば更に大きくなる。こうして生活のほころびが結婚の破綻を招くことになるのである。多分「好きだけでは、やっていけないから、よく考えなさい」との注意を込めてのこの言葉なのだと思う。

「好きなことには騙されやすい」

「過ちは好むところにあり、好む道より破る」というのもある。興味を持つ事柄には、つい深入りして、人の企みに陥りやすいということのようだ。これは、かなり多くの人が経験していると思う。「人の企み」と

いうより、わたしは「誘惑に負ける」と考える。

「好きには身をやつす」は、好きなことのために、身が痩せるほど苦心してもいとわれない、ということだ。「好きなものに崇りなし」は、そんな辛苦の結果が実りをもたらし、大きな成果を上げること、つまり、努力は報いられるということではないだろうか？その他、よく知られた言葉に、「蓼食う虫も好き好き」や、「本業を忘れて好きなことだけやっていると、子を飢えさせる」という意味合いのものもあった。

また、「好きこそもの上手なれ」の反対に、「下手な横好き」という言葉もよく知られている。この二つの短文に共通する語は、「好き」という一点にある。この「好き」ということが、どちらにもよい作用をし、粘り強く、目的に達しようとする力をもたらす。そして実際「上手な方」は、それを生業とする粹にまで達する人も沢山いる。つまり「上手」タイプの人は職業になる。

一方「下手な横好き」タイプは自分のレベルに合わせたやり方、「趣味」として充分楽しめばよい。

それにしても、「好き」という感情を理解しはじめたのはいつ頃、どうしてであろう。わたしを大切に、ごく自然に見守り乳を与え、オムツを変え、暑さ、寒さ、あらゆる危険から守ってくれた母の絶対的な愛が、わたしに「安心」を与え、「安らぎ」をもたらした

てくれたことからではないだろうか。これは、おそらくそれと気づかずに受け入れてきたことだ。けれども、少し大きくなつて真夏の日照りの中を4キロの道のりを一所懸命歩いたあとに、冷たい井戸水を汲んで飲ませてくれた母、高熱を出して苦しんでいるとき、真夜中に遠くの魚屋へ氷を分けてもらいに行つてくれたこと、（これは、わたしが元気になったとき、姉からその話を聞き、真夜中に一人で歩いて行つたとき、お母さんはどんなに怖かつただろうと想像して、母のありがたさを感じたのである）。似たような経験は誰にもあるであろう。こういうことの積み重ねが母を愛し、人を愛し、それが「安心」に、そして「好き」へと変化してゆくのではないかと思う。もしかしたら、このような感情はほとんど誰にも共通しているのかもしれない。この「安心」と「安らぎ」の感情が「好き」のエッセンスではないかとわたしは思っている。わたしが小学3、4年のころ、母が病気になるまで、わたしは母を失うかもしれない不安を抱えた。わたしにできることは祈ることであつた。そして小さな言葉とメモディーが自然にこぼれ出た。もちろん人に聞いて頂けるようなものではないが、わたしなりに、わたし自身はなんとなく安心したのである。音楽への憧憬はこんな小さなことからのようにおもう。

今回「好き」という言葉にこだわつたのは、わたし

が好きなこと、たとえばお花や音楽、読書といったものを好きとはいへ、上手にできるものはないとつないということから、「わたしは全て下手な横好きだな」と残念に思っているからである。けれどもこのころではわたしなりの喜びではないかとも思う。確かに「上手」タイプの方が沢山いらつしやるし、そういう方を羨ましいとも思う。わたしはそのように長（た）けた方から、いいものを少しづつ分けていただけば、それはそれで充分楽しめるのではないか。「上手さん」を羨ましがったり、できない自分を残念がらずに、積極的に「わたしの好きなこと」を、わたしなりのやり方で深めてゆくこと、好きなことの小さなかけらを沢山持つていて、「好きこそもの上手なれ」タイプの方から少しづつ分けていたでいて、そのかけらをだんだん大きくしてゆけば充分幸福なのだと思ふ。

2010年7月20日 火曜

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

平成22年度 第2回（第38回）報告

1 日時 平成22年5月22日（土）

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

- 3 出席者（省略）
 4 使用教材 「漢字字講習用テキスト 初級編
 第四回（全十回）」点字編、墨字編

レーズライター… 關、朕、肖、消、底、紙、朗、
 娘、 郎、浪

- 5 学習会内容
 連絡事項（省略）

前回の復習

5 複合文字（2）

1. 第1基本文字と比較文字で構成される文字（1）
 * 「左」比（4・5の点）とイ下がり（2・3の点）をパーツとして含む文字1つ。

（5）「佐」 第2人偏（4・6の点）とイ下がり（2・3の点）で表わす。

* 「大」比（4・5の点）とケ（1・2・4・6の点）をパーツとして含む文字6つ。

（6）「器」 大（ケ…1・2・4・6の点）と口（レ…1・2・4・6の点）で表わす。

「大」は元は「犬」。

（7）「春」 大（ケ…1・2・4・6の点）と日（リ下がり…2・3・6の点）で表わす。三と人が重なった場合漢点字では「大」で表わす。

◆ 「因」とそれをパーツとして含む文字1つ。

（8）「因」 国構え（レ下がり…2・3・4

・6の点）と大（ケ…1・2・4・6の点）で表わす。

（9）「恩」 因（ケ…1・2・4・6の点）と心（ル下がり…2・5・6の点）で表わす。

（10）「央」 大（ケ…1・2・4・6の点）と才（2・4の点）で表わす。

今回の学習

（11）「英」 草冠（ク…1・4・6の点）と央（オ…2・4の点）で表わす。字式は草冠／央。音読みのエイは漢・呉音。訓読みに「ひい」で、ひで、すぐる」がある。熟語に「英知」「英断」「石英」「育英」「英霊」「英傑」「英才」地名などに「英虞湾（あごわん…三重県の志摩半島にある湾、真珠の養殖地）」「英吉利（イギリス）」他に「蒲公英（たんぽぽ）」がある。

* 「天」ア（1の点）とケ（1・2・4・6の点）の上に点が二つ付いたものをパーツとして含む文字二つ。天の上に点が二つ付いた形を「ソ天」という。ちなみに、一の上に点が二つ付いた形を「ソ一」といい、「前」の字が代表的。

（12）「関」 門構え（モ…2・3・4・5・6の点）と天（ケ…1・2・4・6の点）で表わす。字式は門∨ソ天。音読みのカンは漢音。旧字は「關」

で、門を固く閉じた形を意味している。熟語に「関連」「関心」「相関」「関白」「関数」「機関」「玄関」、地名に「関八州（かんはつしゅう・相模、武蔵、安房、上総、下総、常陸、上野、下野の8カ国）」「関越」「下関（しものせき）」「関が原」「函谷関（かんこくかん・中国河南省西北部にある交通の要地、日本の「箱根の山」の歌にでてくる）」など。

(13) 「送」 しんによう（ヒ・1・2・3・6の点）と天（ケ・1・2・4・6の点）で表わす。字式はしんによう十ソ天。「しんによう」は動き進むことを表し、「ソ天」は人が手で品物を上に捧げた意味を持つ。音読みのソウは漢・呉音。熟語に「運送」「輸送」「配送」「發送」「送信」「伝送、電送」「葬送」「早送り」「仕送り」など。

* 「夫」 ワ（3の点）とケ（1・2・4・6の点）をパーツとして含む文字2つ。

(14) 「規」 夫（ケ・1・2・4・6の点）と見（2・5の点）で表す。字式は夫十見。音読みのキは漢・呉音。訓読みに「のり、ただ、す」。熟語に「規格」「規制」「内規」「三半規管（脊椎動物の内耳にある器官で半円形の管が3個あり、平衡感覚をつかさどる）」など。

(15) 「贊」 貝（オ下がり・3・5の点）と夫（ケ・1・2・4・6の点）で表わす。字式は（夫十

夫）／貝。夫の突き出た部分は頭の飾り（かんざし）を意味している。貝と合わせて神に願いを訴え、助けを乞うという意味をもつ。音読みのサンは漢・呉音。熟語に「賛意」「賛辞」「賛否」「絶賛」「奉賛」など。

平成22年度 第3回（第39回） 報告

1 日時 平成22年6月19日（土）

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者（省略）

4 使用教材 「漢点字講習用テキスト 初級編

第四回（全十回）一点字編、墨字編

5 学習会内容

前回の復習

5 複合文字（2）

1. 第1基本文字と比較文字で構成される文字（1）

* 「央」 ケ（1・2・4・6の点）とオ（2・4の点）をパーツとして含む文字1つ。

(11) 「英」 草冠（ク・1・4・6の点）と央（オ・2・4の点）で表わす。

* ソ天をパーツとして含む文字2つ。

(12) 「関」 門構え（29ページへ続く）

漢文のペーシング

杜子春（一）

于^テ東^ニ市^ノ西^ノ門^ニ、飢寒^ニ之^ヲ
色^ク可^レ掬^ス、仰^{ギテ}天^ヲ長^ク吁^ス。有^リ一
老人^ノ策^ニ杖^ヲ於^テ前^ニ、問^{ヒテ}曰^{ハク}、「君^ハ
子^ヲ何^{カク}嘆^ク」。子^ハ春^ハ言^ヒ其^ノ心^ヲ、且^ツ
憤^ル其^ノ親^ノ戚^ノ之^ノ疎^{ナル}薄^ナ也^ヲ、感^シ激^ス
之^ノ氣^ヲ發^ス于^テ顔^ニ色^ニ。老人^曰ハク、
「幾^{ナラ}縉^{バチ}則^レ豐^{カニ}スルヤ^ヲ用^フ。子^ハ春^曰ハク、
「三五^{ナラ}万^{バチ}則^レ可^シ以^テ活^ク矣^ヲ」。
老人^曰ハク、「未^{ダシ}也^ヲ。更^ニ言^ヘ之^ヲ」。
「十^{ハク}万^ヲ」曰^{ハク}、「未^{ダシ}也^ヲ」。乃^チ言^フ、
「百^{ハク}万^ヲ」。亦^{ハク}曰^{ハク}、「未^{ダシ}也^ヲ」。曰^{ハク}、
「三^{ハク}百^{ハク}万^ヲ」。乃^チ曰^{ハク}、「可^{ナリ}矣^ヲ」。

（杜子春は北周から隋にかけての人と思われる。若い頃から家業をかえりみず、遊び暮らしていたので、財産を使い果たし、親戚や友人にも見放されてしまった。ある冬の日、ボロをまとい腹をすかせた杜子春が、長安の市場の入り口で、長いため息をついていると、一人の老人が話しかけてきた。）

東市の西門に於て、飢寒の色掬すべく、天を仰ぎて長吁す。一老人の杖を前に策く有り、問いて曰わく、「君子何をか嘆く」。子春其の心を言い、且つ其の親戚の疎薄なるを憤るや、感激の気顔色に発す。老人曰わく、「幾縉ならば則ち用を豊かにするや」。子春曰わく、「三五万ならば則ち以て活くべし」。老人曰わく、「未だし。更に之を言え」。十万。曰わく、「未だし」。乃ち言う、「百万」。亦曰わく、「未だし」。曰わく、「三百万」。乃ち曰わく、「可なり」。

東市の西門 || 東市場の西門。長安には東市場と西市場があった。

掬すべし || (飢えご) えた様子がありありと手にとるようになる。

幾縉 || 一縉はひもで連ねた銅銭の一さし。未だし || 未だ足らざる也の略。「まだまだ」。



杜 子春、とししゆん

于 テ 東 市 ノ 西 門 ニ、 飢 寒 之
 色 可 ク 掬 ス、 仰 ギテ 天 ヲ
 長 吁 ス。 有 リ 一 老 人 ノ 策 ク
 杖 ヲ 於 前 ニ、 問 ヒテ 曰 ハク、
 「 君 子 何 ヲ カ 嘆 ク 」 。 子 春 言 ヒ 其
 ノ 心 ヲ、 且 ツ 憤 ル 其 ノ 親 戚
 之 疎 薄 ナルヲ 也、 感 激 之 氣 発 ス
 于 顔 色 ニ。 老 人 曰 ハク、 「 幾 緡
 ナラ バ 則 チ 豊 カニ スルヤ 用 ヲ 」 。 子
 春 曰 ハク、 「 三 五 万 ナラ バ 則 チ
 可 シ 以 テ 活 ク 矣 」 。 老 人 曰 ハ
 ク、 「 未 ダシ 也。 更 ニ 言 ヘ 之
 ヲ 」 。 「 十 万 。 」 曰 ハク、 「 未 ダ
 シ 也 」 。 乃 チ 言 フ、 「 百 万 」 。 亦
 曰 ハク、 「 未 ダシ 也 」 。 曰 ハク、
 「 三 百 万 」 。 乃 チ 曰 ハク、 「 可 ナ
 リ 矣 」 。

参照図書： 岩波ジュニア新書
 「漢文の読みかた」（奥平卓）





漢点字講習用テキスト

初級編 第二十一回

4 基本文字（3）… 比較文字

1. 対、あるいはグループをなす比較文字（1）

※「右」と「左」

(6) 右  ユウ ウ みぎ たつと - ぶ たす - ける

カタカナの「ナ」の右下に「口」を置いた形の文字です。カタカナの「ナ」は、手でものを持つ形を表しています。「口」は、お祈りを容れた器で、神様に祈りを捧げるときに用いるものと言われています。つまりこの文字は、右手で神様に捧げる器を持った形を象ったものです。「みぎ」と読んで右側を表し、中国では右側を優位と考えていますので、「たつとい」の読み、また、右手を添えて「たすける」とも読みます。漢点字では、「」で表されます。

「右往左往」「右顧左眄」「右大臣左大臣」「右側通行」

(7) 左  サ ひだり たす - ける たが - う

カタカナの「ナ」の右下に、「工」（このテキストでは、まだ出て来ていません。）が置かれた形の文字です。神様に祈るときに用いる道具を象ったものと言われています。神様に祈りを捧げるときに、右手に器を、左手に道具を持って行われたと考えられています。「ひだり」と読んで左側を、中国では左は劣位と考えられていました。「たすける」と読んで、手を差し伸べて人を支えることを、「たがう」と読んで、思うように行かないこと、うまく行かないことを表します。漢点字では、「」で表されます。

「右往左往」「右顧左眄」「左遷」「右大臣左大臣」「左側通行」

*日本では、雛人形でも知られるように、官職としては、左大臣が上位です。つまり、左右の優劣では、左が優位です。

古代の中国では、左側に刀剣を佩して、右手でそれを扱うことから、右側が優位、左側を劣位としていました。現在も用いられる「左遷」という言葉は、ここから来ています。

*相撲でもお馴染みのように、中国の文化圏では、北側から南を見る形を採ります。従って、現在の地図とは反対に、左が東、右が西になります。

※「大きい」と「小さい」

(8) 大  ダイ タイ タ ダ おお おお - かい おお - いに



人が大きく手を広げた形を象った文字です。「人」の縦の線に、一本の横の線を交差させた形の文字です。大きな身体、ゆったりとした姿から、「大きい、力強い、偉大な」という意味を表しています。漢点字では、「𠄎」で表されます。点字符号の右側の部分は、第一基本文字の「大」と似ているところから、同じ符号を用いました。

「大学」「大規模」「大満足」「广大」「膨大」「莫大」「大雑把」「大目玉」

(9) 小 ショウ ちい-さい こ お さ

縦の線の両側に点を付した形の文字です。棒を細く削る形を象ったものと言われます。小さいもの、幼いもの、価値の低いもの、つまらないものとして用いられる文字です。そこから謙遜の意味で、自分の方を指す語として用いられます。また、「こ、お、さ」の読みを接頭語として、小さい、幼い、つまらないという意味を表します。漢点字では、「𠄎」で表されます。

「小学校」「小数点」「針小棒大」「小川」「小雨」「小道」「小百合」「小庭」「小利口」

※「出る」と「入る」

(10) 出 シュツ スイ で-る だ-す い-でる
い-だす で

上が開いた箱の形が立てに二つ並んでいて、真ん中を縦の線が通っている形、下には突き出ません。線を跨いで外へ出る形を象っています。「でる」と読んで、中から外へ出る、家から外へ出て働く、中央から地方へ、本社から支店へ出る、家から外へ出て嫁に行く、ぬきんでる、世に出る、生まれた土地や出身校をも表します。「だす」と読んで、嫁を離縁する。また、「すい」の音で、金銭の出金を意味します。漢点字では、「𠄎」で表されます。

「出勤」「出金」「出社」「出発」「出港」「出品」「出店」「外出」「退出」「出处進退」「出口」「出物」「家出」

(11) 入 ニュウ ジュウ い-る は-いる い-れる

入り口が開いた形を象っていると言われます。外から中へ入る、嫁として家の中へ入る、中央の官庁に入るといういみがあります。漢点字では、「𠄎」で表されます。「人」に似ているので、右側の点字符号に同じものを用いました。

「入金」「入学」「入社」「入門」「入力」「入港」「入出」「収入」「歳入」「投入」「出入り」「入り婿」「入り鉄砲に出女」

(24ページから) (モ・2・3・4・5・6の点)と天(ケ・1・2・4・6の点)で表わす。旧字は「關」で、かんぬきをかけた形を意味している。

(13) 「送」 しんによる(ヒ・1・2・3・6の点)と天(ケ・1・2・4・6の点)で表わす。ソ天部分は関とは異なり、船の形をしたために物を乗せ運ぶという意味を表し、物を動かすことからきている。

* 「夫」 ワ(3)とケ(1・2・4・6の点)をパーツとして含む文字2つ。

(14) 「規」 夫(ケ・1・2・4・6の点)と見(2・5の点)で表す。

(15) 「贊」 貝(オ下がり・3・5の点)と夫(ケ・1・2・4・6の点)で表わす。

今回の学習

* 「小」 比(4・5の点)とソ(2・4・5・6の点)をパーツとして含む文字。

◆ 「肖」 と肖をパーツとして含む文字1つ。

(16) 「肖」 ソ(2・4・5・6の点)とラ下がり(2・6の点)で表す。字式は小・月(にくづき)。音読みのシヨウは漢・呉音。訓読みに「あやか」がある。熟語に「肖物(あえもの・手本とするもの)」「肖り者(あやか・りもの・果報者)」「酷

肖(こくしように酷似と同意義)など。

(17) 「消」 さんずい(ニ・1・2・3の点)とソ(2・4・5・6の点)で表す。字式はさんずい十肖。音読みのシヨウは漢・呉音。熟語に「解消」「消毒」「消防」「消滅」「消却」「消去」「消耗」「消息」「消耗」「消臭」「雲散霧消」「意気消沈」「抹消」「打消し」「取り消し」「帳消し」「艶消し」「消え去る」など。

* 「低」 比(4・5の点)とロ下がり(3・5・6の点)の旁をパーツとして含む文字。

(18) 「底」 まだれ(ヨ・3・4・5の点)とロ下がり(3・5・6の点)で表す。字式は广>(氏/一)。音読みのテイは漢・呉音。熟語に「到底」「徹底」「根底」「谷底」「底意地」「上げ底」「二重底」「鍋底」「奈落の底」「底冷え」など。

* 「氏」 ア(1の点)とロ下がり(3・5・6の点)をパーツとして含む文字。

(19) 「紙」 糸偏(イ・1・2の点)とロ下がり(3・5・6の点)で表わす。字式は糸十氏。音読みのシは漢・呉音。熟語に「表紙」「原紙」「印紙」「色紙」「草紙」「誓紙」「画用紙」「手紙」「型紙」「折り紙」「紙屑」「紙風船」「紙吹雪」「紙婚式(かみこんしき・結婚1年目)」「他の読みとして「紙鳶(いか・関西地方という凧のこと)」「紙漕り

(こよゝり) など。紙は、中国の後漢時代の宦官、蔡倫(さいりん)が樹皮・ぼろ布・魚網などから精製し、紀元105年に帝に献上したのが始まりといわれてきたが、前漢期の遺跡から古紙が出土し、前漢(紀元前202年〜紀元後8年)の初期に開発された。一方古代エジプトで紀元前30世紀頃からパピルスという草の茎から製造された紙が使用され、紀元後8世紀頃までヨーロッパでも用いた。

「」報告と「」案内

会員募集



横浜及び東京漢点字羽化の会では、会員を常時募集しております。活動をご希望の方はお申し出下さい。前号でもご案内致しました通り、これまでにほぼ五年に一度の割合で、会員を募集する講習会を開催致しました。今年はその年に当たっています。

① 横浜で

横浜漢点字羽化の会では、以下の要領で会員募集のための講習会を開催致します。

日程… 9/29(水) 13…30、15…30、10/6(水) 12…30、14…30、10/20(水) 13…30、15…30
会場… かながわ県民活動サポートセンター会議室
304(横浜駅北口・西口方面、徒歩5分)

募集… 応募方法・往復はがき、締め切り、9/11(土) 必着。

宛先… 木下和久 〒245-0013

横浜市泉区中田東四・八・八

受講料… 1000円(資料代)

問い合わせ… 電話03-3613-3160(岡田)

内容… 点字と漢点字。パソコンによる入力、校正。

漢点字変換プログラムEIBRWKによる編集の概要と実際

② 東京で

東京漢点字羽化の会でも、以下の要領で、会員募集のための講習会を予定しております。

日程… 11/10、11/17、11/24(水) 13…30、15…30

会場… 港区ヒューマンプラザ7F、竹芝小ホール

(JR・浜松町駅、都営地下鉄浅草線・大門駅、大江

戸線・大門浜松町駅下車、徒歩10分)

募集… 応募方法・往復はがき、締め切り、10/9

(土) 必着。

宛先… 菅野 良之 〒108-0073

港区三田2-17-45

受講料… 1000円(資料代)

問い合わせ… 電話03-3613-3160(岡田)

内容… 点字と漢点字。パソコンによる入力、校正。

漢点字変換プログラムEIBRWKによる編集の概要と実際

以上、多くの方のご参加をお待ち申し上げます。

編集後記

▼「案内」ページにありますように、いよいよ会員募集のための講習会が始まります。こ

れは漢点字図書を作成するためのデータ入力ボランティアを養成するためのもので、横浜と東京の両地区で相次いで開催するものです。ほぼ5年に1度の開催となります▼ボランティア募集の記事が大手の新聞に掲載されると、毎回沢山の方が応募されて嬉しい悲鳴を上げるのですが、実際の所手ほどの講習を受けて、いざ必要なテキストファイル入力の際になると、分からないことが多くて戸惑われる方が多くいらつしやるようで、折角講習を修了されてボランティア活動に参加されても、いつの間にか消えていつてしまわれる方が大部分となってしまう▼原則、漢字かな交じりの文章をそのまま入力するというのが基本ですが、全角と半角文字の区別も曖昧で、長音・マイナス・ハイフンなど一見同じように見える記号が、実は全くの別物だということを理解するのさえ困難な方が大部分です▼そういう困難を乗り越えて、ずっとボランティア活動を続けて下さる方が、少しでも多くおいでいただくといいなと、心から期待してお待ちしています。

(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は 10月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。